はしがき

関西大学東西学術研究所の設立趣旨には、「東西両洋文化の学術研究、殊に比較研究を行い、世界文化の融合に貢献する」と謳われている。この東西両洋文化という言葉に象徴される世界の諸文化の様々な出会いとその道筋については、「絹の道」に代表される「陸の回廊」という視点から語られることが多かった。しかし、ひとたび渡海手段を獲得すれば往来の自由度の高い海は豊かな交流チャンネルを提供してくれる。われわれは、この「海の回廊」という視点から今一つの文化交流の太い環を浮かび上がらせたいと考えた。それは、古くから東アジアや東南アジア世界を結んできた海の回廊であり、インド・アラビア・アフリカ東部を結んできた海上ルートであり、また大航海時代に至っては西洋とアフリカ・アジア・太平洋を結ぶ多様な海上の道であったりする。

われわれは東西両洋をつなぐ海の回廊を通したさまざまな文化の出会いについて多面的に論じることを企図し、アジアにおける、あるいはアジアと世界の間の、さらに小さな島社会と外界との繋がりにも目配せして、「アジアと世界をつなぐ海の回廊――文化の出会い――」と題する国際シンポジウムを平成19年1月19日～20日に開催した。第1日目の基調講演では、生田滋氏が新たな視点から大航海時代におけるヨーロッパ世界とアジアを結ぶワールドシステムに光を当て、張展鴻氏が代表的港市である香港の中国返還後における家庭料理盛行の文化的意味について斬新な視点から読み解いてみせた。「海の回廊」における文化の出会いに関するこの対照的なアプローチを承けて、第2日目は「アジアと世界の出会い――大航海時代を中心として――」、「島社会と外界との文化邂逅――日本・台湾・フィリピン――」、「食文化を通してみたアジア・世界の出会い」と三つのセッションに分かれて、それぞれの時代における文化邂逅の諸相を巡って14の研究報告が行われ、多彩な論が展開された。このシンポジウムのレジュメ集は平成19年10月に「関西大学東西学術研究所シンポジウム報告書シリーズ1」として印刷・配布した。その中で予告したように「関西大学東西学術研究所国際共同研究シリーズ7」として公刊することにし、各寄稿者に改めて原稿の提出をお願

いした。その結果、論文タイトルが改まったり、内容に大幅な改訂を加えられたりしている。したがって、本書の書名も表記のように改め、新たな論文集としての体裁を整え、公刊することになった。

本書は、東洋学に基盤をおいて世界を俯瞰してきた当研究所の今一つのウイングの広がりを示すものであり、この「海の回廊」という視点からの多様な研究発信が江湖の関心を引き、斯界の研究進展に寄与することを願って止まない。

平成 21 年 3 月 31 日

関西大学東西学術研究所

所　長　橋 本 征 治